
真剣で私と恋しなさい

ライラック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私と恋しなさい

【Nコード】

N3317M

【作者名】

ライラック

【あらすじ】

ある日、屋敷で寝ていたなら黒ずくめの集団に殺された新藤玲二。しかし、たまたま通りがかった魔法使いによって新しい世界へと飛ばされたのだった。

魔法使いとの邂逅（前書き）

処女作です。

生暖かい目で見てください。

魔法使いとの邂逅

俺の名前は新藤玲二しんどうれいじ

今、凄まじく混乱している

「は…:？」

目をさますと、そこは白い部屋のような場所だった

「どこだここは？昨日は自分の部屋で寝たはずなんだけどな…:」

そう、昨日は朝から夜までぶっ続けて鍛錬にはげんで、鍛錬が終わると遅めの夕食をとり、入浴して布団に体を投げ出したはずだったしかし、目が覚めたら知らない部屋に一人ぼっこんである
第一声が「は…:？」でも仕方がないといえる

「お、やっと起きたようだな」

自分に話しかけていると理解するのに少しばかり時間がかかったが、そちらに顔を向けた

「あなたは？」

そこには、年老いた老人がいた
いかにも、「魔法使い」的な感じの人物だった

「わしか？わしは魔法使いじゃ」

どうやら、予想的中のようだ。しかし…:

「ふん…」

「おぬし、信じとらん…」

「当たり前でしょう。今時魔法使いだなんて、頭のネジが数本どころか数十本抜けてる人と思われても仕方ないと思いますよ？」

今時、魔法使いだなんて、ねえ…
痛すぎる…

「わしを否定したらおぬし、自分自身を否定する事になるぞ？」

「は？」

どうゆう事ですか？

「…おぬし気づいておらなかったのか？」

「？」

何にですか？

「おぬしがもう既に魂だけの存在だということにじゃ」

はい!？

「どうゆう事ですか!？」

そんな事「はい、そうですか」と信じられる訳がない

「ふむ、つまりじゃ…」

そうして、自称「魔法使い」は話し始めた

自分は古より生きてきた最古の魔法使いである事、でたまたま面白いことを探してフラフラと俺の屋敷の近くを通り過ぎようとしたら面白そうな気配がしたので惹かれてきた事、そうしたら、俺が黒ずくめの集団に殺されていたとの事だった。

さらにこの部屋のことだ。ここはこの老人が魔法で作って、俺の魂がああ世に行かないようにつなぎ止めているとの事だった

「うそ…」

いきなりの突拍子のない話に頭がついていかなくてか、黒ずくめの集団って何だよ…

そんな集団から恨まれるような事した覚えはないぞ…

「嘘なんかじゃないぞい？何なら試してみるかの？」

「試す…？」

「うむ、ほれ」

そう言って手渡されたのは一粒の丸い飴のようなもの

「コレは？」

「わしが、マンドラゴラから作った毒薬じゃ。なに心配せんでも大丈夫じゃよ。すでに肉体は滅んどるんじゃ。飲んでもどうにもならんて…多分の（ボン）」

いやいやいや、全然大丈夫そうじゃないですから！？
しかも最後に多分って言ったるあんだ！

「むちゃくちゃヤバそうなんですけど…」

「ええい、つべこべ言わんとさっさと飲まんか！」

えっ！？ちよ…！！

「んぐ！？」

嫌そうにしてたら無理やり飲まされた。てか、これ苦…！？

「うえ…苦…」

気分だだ下がりだ…orz

「ふむ、なんともないようじゃな」

何ともない訳あるか！！気分が氷点下下回つとるわ！？

「じゃあ、これで納得してもらえた所で、ものは相談何じゃが…」

いやいや、まだ納得してないから！てか、話変わりすぎだろ？！

「どこか、違う世界に行って新しい人生を生きてみんかの？」

は？違う世界？

「そんな事出来んのか？」

「出来るぞい。なんせ、魔法使いだからの」

フオツフオツフオツと笑う爺

もう、何でも有りだな…

「じゃあ、ファンタジーの世界に行かせてくれよ爺」

魔法とか使ってみたいっしょ！

「あ、それ無理」

なん…だと…

「てめ、自分でどんな世界でもいって言ったじゃねえかよ!？」

「確かに言ったが、それはこの世界の常識の中までじゃ」

「?どういう事だよ?」

意味分からんぞ?

「つまりじゃ、おぬしの言うファンタジーの世界は、この世界の常識の範囲外なのじゃ」

ああ、なるほどな

「つまり、あんたの力で行ける世界はこの世界の常識を越えない世界。つまり、魔法や異能っていうこの世界じゃ理解出来ない力があ

る世界には行けないってことか」

「うむ、その通りじゃ。わしの力が及ぶ世界は、平行世界の中のこの世界だけ。魔法や異能がある世界は、この世界ではなく異世界じゃ。わしはまだ異世界に影響を及ぼす力は持つておらんのでな。これが限界じゃよ」

ふうん

あれ？でもだつたら…

「爺、じゃあ何であんたは魔法使えんだよ？この世界の常識じゃあ魔法なんて理解出来ねえだろうが」

「わしの魔法は古の頃からの研究の賜物だからじゃよ。古の世界では今とは逆で科学などよりも信仰などが人々の心の中を占めとつたからのう。宗教などもその名残だしの。」

「なるほどな。昔は神が存在してるってマジで信じてた奴らで溢れてたんだろっからな。今の奴らはまず神なんて信じてなんかいない。今ならいざしらず、昔それもまだ人々が神を崇めてた時代なら、魔法なんて空想の産物を研究してた奴らがいてもおかしくはないか」

ま、その研究で魔法が使えるようになった奴が目の前にいるわけだしな…

「ま、魔法が使える理由は分かったが、んじゃどうすんだ？どこの世界に俺を送る気だよ？」

そう、それが問題だ

「そのこと何じゃが、おぬし武術を習ったじゃろ？」

「ん？まあな、実家が昔から続く武術の名門だったからな、ガキの頃から鍛錬させられたよ」

ま、体を動かすのは嫌いじゃないから自分から鍛錬とかしてたがな

「そこでじゃ、この世界なんてどうじゃ？」

そう言っつて一枚の紙を渡してきた

どれどれ…

ふむふむ…

「なかなか良さそうだな。強い奴がいそうだし、鍛錬には持って来いだよ」

「じゃろ？ここならおそらく飽きることもあるまいて」

その世界は、この世界と同じような文明で同じような人種がいる世界だった。ただ一つを除いては、だが…

ただ一つの違い、それはこの世界がゲームの世界だということだ

「では、早速送るかの」

「そうだな、もうここにいる理由も無いしな」

それじゃあ、第二の人生を楽しむかな

「それじゃあ、送るぞい」

そして、俺の意識は急速に闇に落ちていった的な感じの人物だった

「わしか？わしは魔法使いじゃ」

どうやら、予想的中のようだ。しかし…

「ふ〜ん…」

「おぬし、信じとらん…」

「当たり前でしょう。今時魔法使いだなんて、頭のネジが数本どころか数十本抜けてる人と思われても仕方ないと思いますよ？」

今時、魔法使いだなんて、ねえ…
痛すぎる…

「わしを否定したらおぬし、自分自身を否定する事になるぞ？」

「は？」

どうゆう事ですか？

「…おぬし気づいておらなかったのか？」

「？」

何にですか？

「おぬしがもう既に魂だけの存在だということにじゃ」

はい!?

「どうゆう事ですか!?!」

そんな事「はい、そうですか」と信じられる訳がない

「ふむ、つまりじゃ…」

そうして、自称「魔法使い」は話し始めた

自分は古より生きてきた最古の魔法使いである事、でたまたま面白いことを探してフラフラと俺の屋敷の近くを通り過ぎようとしたら面白そうな気配がしたので惹かれてきた事、そうしたら、俺が黒ずくめの集団に殺されていたとの事だった。

さらにこの部屋のことだ。ここはこの老人が魔法で作って、俺の魂があのある世に行かないようにつなぎ止めているとの事だった

「うそ…」

いきなりの突拍子のない話に頭がついていかなくてか、黒ずくめの集団って何だよ…

そんな集団から恨まれるような事した覚えはないぞ…

「嘘なんかじゃないぞい?何なら試してみるかの?」

「試す…?!」

「うむ、ほれ」

そう言って手渡されたのは一粒の丸い飴のようなもの

「コレは？」

「わしが、マンドラゴラから作った毒薬じゃ。なに心配せんでも大丈夫じゃよ。すでに肉体は滅んどるんじゃ。飲んでもどうにもならんて…多分の(ボン)」

「いやいやいや、全然大丈夫そうじゃないですから！？
しかも最後に多分って言ったろあんた！」

「むちゃくちゃヤバそうなんです…」

「ええい、つべこべ言わんとさっさと飲まんか！」

「えっ！？ちょ…！！」

「んぐ！？」

嫌そうにしてたら無理やり飲まされた。てか、これ苦…！？

「うえ…苦…」

気分だだ下がりだ…orz

「ふむ、なんともないようじゃな」

何ともない訳あるか！！気分が氷点下下回つとるわ！？

「じゃあ、これで納得してもらえた所で、ものは相談何じゃが…」

「いやいや、まだ納得してないから！てか、話変わりすぎだろ?!」

「どこか、違う世界に行って新しい人生を生きてみんかの？」

は？違う世界？

「そんな事出来んのか？」

「出来るぞい。なんせ、魔法使いだからの」

フォッフオッフオツと笑う爺

もう、何でも有りだな…

「じゃあ、ファンタジーの世界に行かせてくれよ爺」

魔法とか使ってみたいっしょ！

「あ、それ無理」

なん…だと…

「てめ、自分でどんな世界でもいって言ったじゃねえかよ!？」

「確かに言ったが、それはこの世界の常識の中までじゃ」

「?どういう事だよ？」

意味分からんぞ？

「つまりじゃ、おぬしの言うファンタジーの世界は、この世界の常識の範囲外なのじゃ」

ああ、なるほどな

「つまり、あなたの力で行ける世界はこの世界の常識を越えない世界。つまり、魔法や異能っていうこの世界じゃ理解出来ない力がある世界には行けないってことか」

「うむ、その通りじゃ。わしの力が及ぶ世界は、平行世界の中のこの世界だけ。魔法や異能がある世界は、この世界ではなく異世界じゃ。わしはまだ異世界に影響を及ぼす力は持つておらんのでな。これが限界じゃよ」

ふうん

あれ？でもだつたら…

「爺、じゃあ何であんたは魔法使えんだよ？この世界の常識じゃあ魔法なんて理解出来ねえだろうが」

「わしの魔法は古の頃からの研究の賜物だからじゃよ。古の世界では今とは逆で科学などよりも信仰などが人々の心の中を占めとったからのう。宗教などもその名残だしの。」

「なるほどな。昔は神が存在してるってマジで信じてた奴らで溢れてたんだろうからな。今の奴らはまず神なんて信じてなんかいない。今ならいざしらず、昔それもまだ人々が神を崇めてた時代なら、魔法なんて空想の産物を研究してた奴らがいてもおかしくはないか」

ま、その研究で魔法が使えるようになった奴が目の前にいるわけだしな…

「ま、魔法が使える理由は分かったが、んじゃどうすんだ？どこの世界に俺を送る気だよ？」

そう、それが問題だ

「そのこと何じゃが、おぬし武術を習ったじゃろ？」

「ん？まあな、実家が昔から続く武術の名門だったからな、ガキの頃から鍛錬させられたよ」

ま、体を動かすのは嫌いじゃないから自分から鍛錬とかしてたがな

「そこでじゃ、この世界なんてどうじゃ？」

そう言って一枚の紙を渡してきた

どれどれ…

ふむふむ…

「なかなか良さそうだな。強い奴がいそうだし、鍛錬には持って来いだろ」

「じゃろ？ここならおそろく飽きることもあるまいて」

その世界は、この世界と同じような文明で同じような人種がいる世界だった。ただ一つを除いては、だが…

ただ一つの違い、それはこの世界がゲームの世界だということだ

「では、早速送るかの」

「そうだな、もうここにいる理由も無いしな」

それじゃあ、第二の人生を楽しむかな

「それじゃあ、送るぞい」

そして、俺の意識は急速に闇に落ちていった

魔法使いとの邂逅（後書き）

疲れました。

まだ、恐る恐る書いてますが、これから慣れていったらいいな
と思います。

川神院（前書き）

短くて駄文にも程があります。ですので、生暖かく見てください。

川神院

(ここは?)

俺が目覚ますとそこは知らない部屋だった

「おお！目が覚めたかの。体調はどうじゃ？」

俺が呆然としてみると、白い羽織りを羽織っている袴姿の老人が部屋に入ってきた

(こいつ…。相当強いな)

仮にも前の世界では武道を極めようとしていた身。相手の力量は測れるくらいには修練を重ねている

「一応…何ともないようです…。あの…ここはどこですか？」

とりあえず、警戒しながら返事をする

「そんなに警戒せんでも大丈夫じゃよ。ここは川神院じゃ」

川神院？聞いたことないな？ま、初めて来たところなんだから当たり前だが…

「あの、川神院って何ですか？」

「うむ？川神院を知らんのか？」

そら知りませんよ。なんたって別世界の人間だったんですから

「はい、すみません…」

「別によいがの。川神院とはの…」

そう言つて老人が川神院の事を話してくれた。

曰く、関東三山の一つで、厄除の寺院として名高くそれが市の名前になるほどだということ。また、『己を高め気力で厄を祓う』という考え方のもとで武道の鍛錬場所としてはかなり有名ならしい。

(とことは、ここは川神市つてことなのか)

と、話を聞きながら自分の現状を確認していると、俺が何でここで寝かされていたのか説明がなされた

「お主は、院の前で倒れておつたのじゃよ。起こそうと色々したんじゃがの、全然起きる気配がせんかったのでここまで運んで来たと言つ訳じゃ」

色々つて何したんだ爺さん？

「そうですね。色々とご迷惑をおかけしました。ちなみにどのくらい寝てましたか？」

「なに、かまわんよ。わしも楽しめたのでな。ちなみに、わしが見つけてから二時間経つておる」

おい！！本当に何した、くそ爺！？そこんともそつと詳しく聞かせろ？！

「…そうですか。何か素直にお礼が言いにくいんですが…。ちなみに、色々って何したんですか…?」

「む？聞きたいかの？」

何かすごい、いい笑顔なんですけど…

「…いえ、やっぱりやめときます」

嫌な予感しかせんがな…orz

「そうかの？まあ、よいわい。それより、なんであんな所で倒れておったのじゃ？」

(やっぱり、聞いてくるよな。当然だと思っが…。
さて、どうやってごまかすか…)

さすがに、「別の世界から来ました」なんて言える分けがない。そんな事を言えば俺の精神が疑われる。下手したら、痛い子を見る目で精神科に連れて行かれかねない

「あ、その…」

俺がなんて言おうか考えていると、それをどうとったのか、

「別に話さんでもよいがの。そんな事は些細なことだしの。言いたくなったら話してくればよいぞい」

些細なこと？こんな素姓の知れない人間が？そんなんでいいのか？

「すみません。ありがとうございます」

まあ、気にしないと言うなら今はそれに甘えとくか。俺もまだ完全には頭の整理が出来てないし、ここを出て行ったら関係なくなるしな。

よし、いつまでも厄介になっっている訳にはいかない。ただでさえ見知らぬ土地に来たのだ。これからの生活の事、主に衣食住について考えなければいけない。考える事は山積みだ

「では、そろそろ出ていきますよ。いつまでもここに居る訳にもいけないので」

そう言っつて寝かされていた布団から出ようとすると、

「まてまて、そんなに急いで出て行かんでもいいじゃろ。それに、そんな格好でどこに行くつもりなんじゃ？」

「え？」

そこで、ようやく俺は自分の格好に気が付いた。全裸であることに、しかも、

（何か、背が縮んでる！？）

手足が前にいた世界より明らかに短い

（なんでだ！？）

これからも前途多難である

試合（前書き）

何だかとても適当な文になってしまった…。
文才欲しいな。

今回は戦闘がありますが、オリジナルの技とかが出て来ます。
原作をこよなく愛する方には不快かもしれませんが、よろしくお願
いします。

試合

「どうしてこうなった？」

玲二は今、川神院の道場にいる。しかも、目の前には大体小学生高学年くらいだと思われる美少女。

この魔窟とも言うべき川神院の実質的トップ『武神』川神鉄心の孫である川神百代だ。

何故俺が百代と対峙しているかと言つと、それは一時間くらい前にさかのぼらなければならぬだろう。

- 一時間前 -

玲二が全裸で寝ていたという事実には打ちひしがれていた時（今はちゃんと服を着ている）、部屋の襖が勢いよく開かれた。

「おいじじい！師範代がおまえが道場に来ないから朝稽古始められないって嘆いてるぞ？」

そこに居たのは、なんとまあ将来が楽しみになる程の凛々しい黒髪長髪の美少女がいた。

「お、忘れておつたの。しかし、こちらも色々あったからの。仕方なかったのじゃよ。稽古、初めておいてと言つてきてはくれんかの？」

と、爺さんが美少女に伝言を頼むが、

「嫌だ。面倒くさい。自分で行け」

とてもではないが、年長者に対する言葉使いではない。まあ、自分も似たようなものだが。

玲二が突然部屋に入ってきた美少女を観察していると、美少女が俺に喋りかけてきた。

「おまえ誰だ？」

そこで玲二は気付いた。今まで爺さんとも喋っていたが、お互いに自己紹介もしていない事に。

「おお！そうじゃ。そろそろ名前を教えてはくれんかの？わしは川神鉄心。この川神院の長じゃ。ちなみに、川神学園の学長でもあるぞ。こっちは、孫の川神百代じゃ」

また、聞きなれない学園の名前を聞いたがとりあえず玲二も自己紹介することにした。

「あ、俺の名前は新藤玲二だ。よろしく」

互いの自己紹介が終わるや否や、川神百代が言ってきた。

「おまえ強いだろ？私と勝負しろ！」

えっ？何で俺が強いってわかるんだ？確かに家じゃ、実力的には上の方だったが…

「何で俺が強いって思うんだ？」

「んー、なんとなくだな」

えー、なんだよそれ…。野生の勘か？

面倒だな。適当に理由つけて避けるかな。

「悪いけど、むやみやたらに力を振るうなっつてのが家の教えだから
丁重に断るよ」

別に嘘じゃないしいいな。

「はっ。私の申し出を断るとはいい度胸だ。これは意地でも戦って
貰わなきゃな！！」

いや、そんなこと言われたっつてな、それに戦う理由もないし…。て
か、あんたどんだけ戦いたいんだよ！^{バトルマニア}戦闘狂か？そうなんだな！？

「いや、そんなこと言われても…。

第一、戦う理由もないだろ？」

なんとか理屈で戦闘回避を試みる。しかし、どうしても百代は戦い
たいらしかった。

「戦う理由なんかいらないだろ。どちらの力が上か。それを決める
というだけで十分だ！

ジジイ！審判は任せるぞ！！」

百代が鉄心に審判を頼んだ。

「やれやれ、喧嘩っ早い。よかろう。ジャッジなら公平にしてや

るぞい」

おいこそ爺！人がせつかく戦闘回避にいそしんでるってのに何すんなり了承してんだよ！？あんた、此処じゃ一番偉いんだろうが！そんな簡単に引き受けていいのかよ？！

「よし。これで問題はないな。ついでに今この時をもってこの試合は正式な試合になったから、拒否は許されないぞ」

え？なにそれ？どゆこと？？

「何だよ！？俺了承してないだろ！！」

「そんなことしらん」

え…

「じゃ、早速いくぞ」

俺は襟首を掴まれ引きずられていく。

・冒頭に戻る・

「おまえ、武器は使うのか？」回想に耽っていると百代の言葉で現実に戻された。

「えっと、一応鋼糸を…」

「鋼糸？ずいぶん珍しいものを使うんだな」

「まあな。それで、あるのか？」

鋼糸という武器はそんなにあるものではない。何故なら鋼糸の製造には時間と労力がかなり掛かるからである。

鋼糸は必ず最低でも数十人以上の職人が携わり作られる。

鋼糸とは、読んで字の如く極細の鋼の糸を数百から数千、果てには数万といった数を専用の武具に取りつけ、初めて武器足りえるものになる。そのため制作にはかなりの神経と、尚且つ膨大な時間がかかる。極細の鋼糸を数百から数千、数万本作らなければならず、しかも鋼糸一本作るのにも相当の時間が掛かるのだ。その苦労は推して知るべしである。

そのため、鋼糸の値段は高い。数百本の鋼糸は値段にして数百万円はする。数千、数万本の鋼糸もそれ相応の値段がする。

鋼糸という武器は一本一本がとても細い。糸特徴のしなやかな動きが無くなればそれはもう鋼糸ではなく、ただの鋼の棒だ。故に、糸としてのしなやかな動きを損ねることなく限界まで極細にし、武器として扱えるようにしなければならぬ。

しかし、いくら鋼の糸だからと言ってそれだけ極細にした糸の耐久力などたかが知れる。故に、いかにしてその糸を切らず相手の攻撃をいなし、かわし、受け流し、相手を制圧出来るかが鋼糸使いの腕の見せ所なのである。

とまあ、色々な理由から鋼糸使いは非常に少ない。新藤家は数少ない鋼糸使いの家だった。

「あるぞ。何型を使うんだ？」

鋼糸は大きく分けて三つの型がある。

まあ、簡単に言えば攻撃型と防御型、バランス型である。

鋼系の数で敵を翻弄して押しつぶす攻撃型、鋼系の数は少ないがその分小回りが利く防御型、攻撃型と防御型の中間の数の鋼系でどちらもこなせるバランス型。

鋼系の数が多ければ攻撃に威力が上がり、少なければ鋼系一本一本にさく意識を減らせるので小回りが利いて確実に防御がしやすくなるなどの利点がある。

新藤はバランス型の使い手だ。

バランス型というと器用貧乏と言われがちだがそれは違う。バランス型の心髄は如何にして相手の攻撃手段を潰し、相手を自分の土俵に引っ張り込み仕留めるかにかかっている。自分が相手の土俵に立たなければたとえ勝てなくとも此方が負ける事はない。故に、三つの型の中で最も攻守がしやすく変幻自在だと言われている。

「バランス型を」

「ほらよ」

そう言っただ百代が此方に黒い手袋を投げってくる。手袋は先端に鉄で出来た鉤爪のようなものが付いており、その先端から鋼系が出る仕組みになっているようだ。

俺は右手にその手袋をはめた。

「では、準備も終わったようじゃしそろそろ初めてもよいかの？」

爺さんが聞いてくる。

「私はいつでもいいぞ！」

百代はかなりやる気のようにだ。

「俺もいいぜ！」

玲二もどうやらこの空気に毒され始めたようだ。

「それではこれより川神百代对新藤玲二の試合を始める」

周りの連中が息を呑む音が聞こえる。

「西方、川神百代！」

「ああ！」

百代が名前を呼ばれ返事をする。

「東方、新藤玲二！」

「おう！」

玲二も返事を返す。

「いざ尋常こ！」

一拍ほどの間。

「はじめいつ！…！」

こうして戦いの火蓋が切って落とされた。

「いくぞー！」

百代が裂帛の気合いを纏って突っ込んでくる。

玲二は、腕を上から下に振り下ろし百代の進行を阻まんと鋼糸を走らせる。しかし、百代はそんなことお構いなしにこちらの攻撃を叩き落としながら拳を繰り出してくる。玲二はすぐさまその拳をサイドステップでかわし次の行動に移る。

先の攻撃で叩き落とされた鋼糸を操り、背後から襲わせる。しかし、これもまるで背中に目があるかのようや動きでかわされた。しかし、かわされるのはこちらも想定済みだ。すぐさまかわした先を先読みし、鋼糸を向かわせる。

だが、それは百代も読んでいたらしく、すぐに体に纏っていた気を解放し鋼糸を吹き飛ばした。

お互い、距離を取り視線を逸らさず相手の出方を窺う。

「やるな。おまえ！」

百代が体を震えさせ、笑いながら話しかけてくる。

「お前もな！」

玲二も口角を吊り上げながら答える。

どうやら百代の体の震えは怯えや恐怖から来るものではなく、強敵と出会えた事への喜びのせいのようなのだ。

「ココまで私相手にもった奴は久しぶりだ！最高だな、おまえ！！」

「そりゃどうも。俺も久しぶりだぜ！こんなに血が騒ぐ戦いはよ！

！」

百代が玲二を称賛し、玲二も百代を称賛する。

お互い相手の実力は今の一連の攻防で把握している。攻撃力では百代。防御力では玲二ってところだろう。どちらも一筋縄ではいかない相手だ。

「さて、じゃあ続きと行こうか！」

「ああ、今度はこっちからいくぜ!!」

玲二は鋼糸で百代の足を薙ぐように放った。百代は自分の足が薙かれる寸前、上に飛んで鋼糸をかわす。鋼糸が空をきる。しかし、玲二も読んでいたらしくそれを逆手にとる。空中ならば動けない。動けなければかわせない。

玲二は腕を上下左右に振り、自身が習得している技の一つを放つ。

「新藤流鋼糸術 十字楽章 一章『鳳仙花』」

空中にいる百代のもとにまるで花弁を模ったような鋼糸が殺到した。この技は鋼糸の形の花弁が相手の肉体に食い込み、鋼糸が血で染まりまるで『鳳仙花』が咲き誇っているように見えるので名付けられた技だ。

（終わりだな）

玲二は勝利を確信した。技の手応えは有った。死にはしないだろうが、数日は寝たきりだろう。

しかし突如、鳳仙花の花弁が吹き飛んだ。

「なに…?」

その中から全身に切り傷を作った百代が出てきた。傷の具合は命に別状はないが、それでも軽くはないといったところか。痛みもかなりあるだろうに顔には全く出さず、対照的に顔は笑顔だった。

まるで、子供が新しいおもちゃを買って貰いそのことにしか興味がないかのような…。

その笑顔に玲二は寒気を感じた。

「おまえ、やっぱり強いな。最高だよ」

(なんだ。この悪寒は?)

「おまえ、いや…、玲二!」

百代が玲二の名前を叫んだ瞬間、空気の温度が下がった。それはもう、ガックリと…。まるで首筋に刃物でも押し付けられているかのように背中の冷や汗や汗が止まらない。

「まだまだ終わりじゃないだろ?玲二?」

あれほどあった体中の傷が瞬く間にすべて塞がっていき、傷も綺麗に消えた。

「な!?!なんだそりゃ!?!?」

玲二は叫んでいた。

あれだけ傷ついていた体が数秒でもとの体に戻ったのである。

玲二の動揺も仕方がない。

「お前、何もんだよ…」

「さあ、続きをしようか。玲二!!!」

百代は叫びながらこちらに突っ込んでくる。ただし今回は先ほどとは比べものにならないくらいに速かった。

(っ!!はええ!?)

玲二は急いで迎撃しようとするが間に合わないと瞬間的に悟り、自分の体に鋼糸を巻きつけ、さらに自身の前方に鋼糸の網目状の壁を作った。しかし、それだけでは今の百代は止まらないらしく、網目状に張って作った壁が容易く引きちぎられ、百代の拳によって玲二は吹き飛ばされ、血を吐きながら壁にめり込んだ。

「ぐはっ!?!」

一瞬意識が飛びそうになった玲二だったが、なんとか意識を手放さずに済んだ。ここで意識を手放せば試合は終了。楽になるだろう。だがこれしきの事どうという事はない。

「いってえ。効いたぞ、今のは」

壁から出てくる玲二を未だに背筋が寒くなる笑顔と視線で見つめてくる百代。

「…へっ。追撃もして来ねーで随分と余裕だな!そのくそ忌々しい顔、潰してよるよ!」

「はっ!やってみせる!」

そう言うと玲二は消えた。と、次の瞬間には百代の背後を取り、百代の背後に鋼糸を放っていた。百代も見えているのか即座に反応し、これを拳に纏わせた氣で迎撃する。迎撃したのも束の間に、今度は百代が打って出た。

迎撃された時に出来た一瞬の隙を見逃さず、玲二の懐に飛び込み拳の連打を浴びせる。どの一撃とつても一発で岩をも破壊するような一撃を玲二は鋼糸を使い、絶妙なタイミングで衝撃を逸らし、いなし、かわす。

両者一步も引かず幾多の攻防を繰り広げるが勝負が全くつかず、試合会場だった道場も今では見る影もない程に破壊されつくしている。この攻防を最初から最後まで見届けているのは何人いるか…。

鉄心がそろそろ止めるかどうかを真剣に悩み始めたところで、両者の間で動きがあった。

玲二が百代に牽制目的で放った鋼糸が甘く入り見切られ、百代の接近を許してしまった。玲二は直ぐに体の周りに鋼糸を張り巡らせたのだが、如何せん百代は多少の傷を受けてもたいした傷にもならず直ぐに再生するという反則技を使うのであまり効果が表れず、玲二は懐に潜り込まれてしまった。

百代は玲二の胸の辺りに手のひらをそえるように突きつけ、ニヤリと笑った。

「川神流衝拳奥義 一の型 『爆砕牙』」

瞬間、玲二の胸辺りから爆発が起こった。

この技は本来、膨大な氣を手のひらに集め、それを圧縮、そして圧縮限界を迎えた氣を相手に放つ遠距離攻撃用の技である。

しかし、百代の超回復がそれを近距離攻撃用の技として昇華させた。実際、あれだけの爆発の中心に居たのにもかかわらず、無傷である。

「がはっ！」

玲二は再度血を吐きながら吹き飛ばされ、壁にめり込んだ。

「くっそ……」

玲二は壁から出ようとしますが、体が動かない。

(ちっっ、ここまでか……)

「それまでいい！ 勝者、川神百代！！」

鉄心がこれ以上は続行不可能と判断したため試合終了の宣言を下した。

玲二は試合終了の宣言を聞きながら意識が闇に落ちて行った。

養子（前書き）

文章って難しいですね…。

養子

目が覚めると其処は初めにいた部屋で寝かされていた。

「目が覚めたかの。気分はどうじゃ？」

爺さんが聞いてくる。

「体中が痛え」

「ほっほ。そうじゃろうな。何せ百代との試合じゃ」

爺さんが言う。

(誰のせいだと思ってんだよ……)

玲二は心の中で悪態を吐く。

「ああ、予想外にも程があるぜ。

聞いていいか？」

玲二は首だけを爺さんの方に向けて言う。

「質問にもよるが、大体の質問には答えよう」

「じゃあ聞くが、あいつは何者なんだ？俺が付けた傷が数秒で完治した技といい、最後に使ったあの自爆技といい、普通の武道している奴の技じゃなかった」

とりあえず、気になったことを聞いてみた。

「ふむ。まず、一つ目の質問から答えると百代はれっきとしたわしの孫じゃ。それとお主が付けた傷が回復したのは、川神流の奥義の一つじゃよ。まあ、普通はあそこまで強力ではないがの。せいぜい、傷の治りを補助する程度じゃ。」

それと『爆碎牙』の事じゃが、あれは本来遠距離攻撃用の技じゃ。あそこでアレを繰り出しピンピンするのは、孫だけじゃよ」

爺さんが俺の質問に答えてくれる。

「化け物だな…」

どんな傷もたちどころ治り、自爆技を使ってもなお平気とは…。自分がそんな奴を相手にしていたと思うと背筋が寒くなる。

「ちなみに、孫の『爆碎牙』を貰ってその程度の傷で済んだ人間はお主が初めてじゃよ。確かアレ、岩に大穴あけとったぞい。そう考えると、お主も相当の化け物だと思うがの」

「俺をあんな化け物と一緒にするな。打たれ強さには多少の覚えはあるが、それでも人間の常識の範囲内だ」

玲二は体の頑丈さには多少の覚えがある。それでも、戦闘中に貰った傷が戦闘中に治癒するなんて反則技など持っていない。

「（人間、誰もが自分の事になると鈍感になるといっが…）まあよいわい。それよりお主、これからどうするんじゃ？」

（そういえば、考えてなかったな。色々あって忘れてた…）

玲二が返答に詰まっていると、爺さんがとんでもない提案をしてきた。

「お主、もしも行く当てがないんならここの養子にならんか？」

玲二は驚いた。普通、出会って数時間の人間を養子にするなど考えもしないだろう。

「何で俺なんかを？」

「ふむ。それはの、百代とお主のためじゃよ」

「あいつと俺のため？」

俺とあいつにどんな繋がりか？

「百代と戦いどう思ったかの？」

「強者。ここの強さの基準は知らんが、まず間違いなくトップクラスの実力者だろうな」

玲二は前の世界では『神童』と言われてきた。習得に数十年かかると言われる新藤流鋼糸術を僅か数年でおさめ、天才の名を欲しいままにしてきた。

その玲二が多少、体に違和感があるとしてもそんじょそこの武道家に負けるはずがない。

そう考えると、玲二に勝った百代は相当の実力者だというのが分かる。

「そうじゃ。百代は強い。じゃが、だからこそ『強者故の孤独』もある。お主にも分かるう？」

「…ああ」

強すぎる力は人に尊敬や憧れを抱かせると同時に、畏怖や恐れも抱かせる。

玲二も強者だからこそその孤独に苛まれた事もある。

「じゃから孫の事を任せられる者を探しとったのじゃ。お主ならば少なくとも『強者故の孤独』に苛まれる事はなくなるじゃろ。そしてこれはお主のためにもなるじゃろうしの」

確かに玲二ならこの件には最適だろう。『強者故の孤独』も知っているし、強さも問題はあるまい。だが、

「俺に何か得があるのか？」

向こうだけが得をしてこちらには何もないので納得が行かない。

「それは、お主の意見を可能な限り聞こう」

「分かった」

それから玲二は交渉に入った。

戸籍などこの世界で生きて行くには最低限必要なものを要求し川神院の養子となり『川神玲二』となった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3317m/>

真剣で私と恋しなさい

2010年10月9日14時33分発行